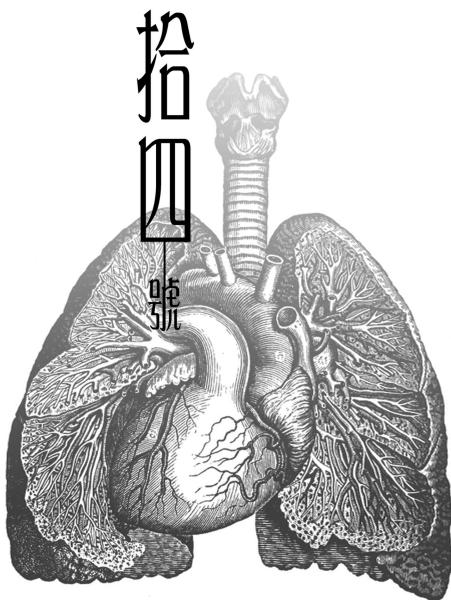


非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会14号 目次

企画

企画1 「新本格三十周年記念競作」

首切りパズル 2.0

バースデイ・マörderケース

XXの悲劇

時兇館事件、もしくはは思い違いなカーテンフォール

〈評論〉「新本格」のウロボロス

企画2 ショート・ショート(森煮豆仁/麻里邑圭人/佐倉丸春)

その他

〈連載〉富士見ミステリー文庫ガイド 第五回

麻里邑圭人 …………… 6

岡村美樹男 …………… 32

足住公達 …………… 61

紫藤はるか …………… 96

松井和翠 …………… 131

…………… 138

ないとー …………… 149

表紙・扉ページ

ウスタアヤ

企画 1

「新本格30周年記念競作」

今回のお題は「新本格30周年記念競作」です。

各自が「新本格っぽい」作品を目指してオリジナル作品を創作しました。新本格っぽいとは何か？ という所は基本的に作者にお任せしていますが、「仕掛けを成立させるための人工的な舞台設定」や「どことなく感じる青臭さ」などを方向性として提示しました。

それと今回、参加者に新本格への想いについてアンケートを実施しました。各作品の末尾に収録していますのでそちらもあわせてお楽しみ下さい。

首切りパズル 2.0

麻里邑圭人 まりむらけいと

※本作には麻耶雄高『翼ある闇』の真相の一部に触れている箇所があります。未読の方はご注意ください。

【プロローグ】

怪物の咆哮にも似た凶暴な音と共に、銀色の刃がゆつくりとその中に呑み込まれていく。その瞬間、湧き水のように噴き出した色鮮やかな紅い液体を見て、××は図らずも美しいと思ってしまった。

もちろん 勿論、自分は断じてその手の異常者ではないと信じている。ただ、今はちよつと色々なことがあつたために神経がおかしくなっているだけだ。だがこれから自分がやろうとしていることを考えると、むしろ今くらいの精神状態の方が丁度いいのかもしれない。

幸い、凶暴な音はそれ以上に大きい列車の走行音がか

き消してくれる。

ゆつくりと刃を引くごとに噴き出す液体の量が増し、噎せ返るような臭気が室内に充満するが、それでもベッドに横たわる男はびくりとも動かない。ただただ、されるがままになつている。そうしてベッドの白いシーツはもとより、男が身に付けている白いワイシャツや模様らしきものがプリントされたネクタイがみるみる真っ赤に染まつていく。

……

それから程なくして、絨毯の上にドサリと重いものが落ちたのが分かった。

【第一部】

正直に言えば、その列車に乗り込んだ時からイヤな予

感がしていたのだ。

その列車——寝台特急「カテリナ」は上野から札幌までの区間を十六時間かけて走行する十両編成の長距離列車だが、普通の寝台特急列車では考えられない高級ホテル並みのサービスが受けられることから旅行の一環として利用する乗客も少なくない。そして、かくいうオレもその一人だった。

オレが一仕事終えて上野駅から乗り込んだのは今から七時間前のこと。当初の予定では日頃の生活から離れた気分をリフレッシュさせるはずだったのに、いざ実行に移してみたらリフレッシュどころかモヤモヤしたものが靴の裏にこびり付いたガムよろしく、ずっと胸の内側にこびり付いて離れない。それが例えば、ただの予感程度のものであれば差ほど気にも留めなかっただろう。だが、そこに「イヤな」という形容詞が一つ付いただけで事情が大分変わってくる。分かりやすく言えば「イヤな」予感になった途端、的中率は確変モードに突入するのだ。オレは、それが杞憂であつてくれと自分が無神論者であることを棚に上げて、心の底から神に祈つた。

だから、3号車——食堂車^{ダイニングカー}で一人遅い昼食を摂っている時に「すみません」とまたしても声を掛けられたのに

はかなり肝が冷えた。

ちなみにこの食堂車は二階建て構造で、一階が厨房、二階が食堂になっている。

（一度目の朝食の時は単純なウエイトレスの人違いだったが、今回は果たして……？）

オレは座つたまま首だけを動かして、サングラス越しに声の主を見た。

そこに立っていたのは、またしてもウエイトレスだった。艶やかな長い黒髪と陶器のように白い肌が目を引く美女。その清楚な見た目は、今や絶滅寸前の大和撫子を思わせる。

さてはまた人違いかと思つたが、食堂車に客がオレしかいないところを見る限りそれはなさそうだった。

オレはいつもの癖で、ウエイトレスが胸に付けているネームプレートをさりげなく確認した。

……ふむ、この美女の名前はリサというのか。予想はしていたものの、やはり古風なのは見た目だけだったらしい。と同時に脳裏にある言葉が浮かぶ。

——美女の陰に事件あり。

いやいや、そんなまさかな……とそれを否定しかけたところで、リサというそのウエイトレスは流暢ながらも、やや躊躇ためらいがちにある名前を口にした。

「失礼ですが、由比藤様ゆいとうでいらつしやいますでしようか」
それを聞いた途端、オレは思わず頭を抱えなくなった。
やはりイヤな予感が的中してしまった。心の中で盛大に舌打ちしつつも、あくまで表面は平静よそおを装ってリサに言葉返す。

「いいえ。誰かとお間違えではないでしようか」

……だが、幾ら表面だけ取り繕ったところで、声が引き攀かつていては意味がない。案の定、リサはオレの返答を聞くなり、疑わしげな眼差しで

「でも、そのお顔は間違はなく由比藤様ですよね」

「ええと、他人の空似というやつじゃないですか？」

オレはリサに気付かれぬよう、素早く迎りを見回した。
幸いなことに、この場にはオレと彼女の他には誰もいない。

「でもワタシ、由比藤様には一度お会いしたことがあるんです。そのワタシから見ても、あなたは瓜二つとしか思えません」

(瓜二つ、ね)

オレはその言葉を内心苦々しい気持ちで聞きながら、一方で何とかこの淑女レディに諦めてもらおうと、あれこれ思いついた言葉を並べ立てる。

「しかしそう仰られても、私にはその……ウイトウさんでしたっけ？ ……には、全く心当たりがないんですよ。ですから何度聞かれても知らない、分からないとかお答えできませんし……というか、私なんかに構っていても時間の無駄だと思わんですよね。時は金なりと言いますし、時間はもつと有意義に使いましようよ」

そう言つて、ちらりと腕時計に視線を落としてみせると、途端にリサの顔に狼狽の色が浮かぶ。

(いいぞ。その調子だ)

オレは心の中でほくそ笑むと、そのまま一気に畳み掛けようとした。

だがその時、それまで小刻みに揺れていた列車が一際大きく揺れて、無防備なオレの体は慣性の法則に従つて前につんのめつた。その拍子にサングラスがズリ落ちて、オレの素顔がリサの前に晒される。

(しまった！)

慌ててサングラスをかけ直したが、時既に遅し。オレに向けられたリサの眼差しがそれまでと明らかに違うの

を感じて、ひどく陰鬱な気分になった。

「その顔……」

リサは近くの座席を掴んでいた手を離すと、狼狽から一転、キラキラと目を輝かせながら一オクターブ高い声で言った。

「ワタシの目に狂いはありませんでしたわ。やはり、あなたはあの名探偵の由比藤司様だったのですね！」

＊

名探偵・由比藤司——その名前は一部の人間からは神格化されていると言っても決して過言ではないだろう。

これまでに解決した事件は五十を超えと言われ、しかもそのほとんどが警察も手を焼く難事件ばかりだったことから、いつしか警察からも一目を置かれる存在になつていた。記憶にある限り本人は名探偵などとは一度も名乗ったことはなかったが、本人があずかり知らぬところでいつの間にかそんな大仰な代名詞が付けられているなんてことは割とよくあることである。

そしてそういった名探偵というのは、かのシャーロック・ホームズや金田一耕助を見れば分かるように、時に

アイドルか何かと同一視する者も少なくない。だからこそオレはその手の人間を警戒して、常にサングラスをかけるようにしていたのだけ……残念ながら、それも無駄なあがきに過ぎなかったようだ。

「……騙し絵コレクターの館で密室殺人が続発する『トリック館事件』、令嬢の誘拐事件と裏庭で発見された逆さ吊りの首なし死体の謎が意外な結び付きを見せる『御神楽邸事件』、無差別に殺した人間の眼球を雪だるまに埋め込み警視庁に送り付けてくる姿なき殺人鬼と対決する『スノーマン事件』等々、由比藤様のこれまでのご活躍は枚挙にいとまがありませんわ」

と、その手の人間もとiriサは、うっとりとした眼差しをオレに向けながら言った。個人的には、そろそろ「様」付けで呼ぶのはやめてほしいと思う。

続きは

「非実在探偵小説研究会14号」

でお楽しみ下さい。



非実在探偵小説研究会～Airmys～14号

発行日 2017年11月23日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 600円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2017 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています